



富士見丘だより

No.5 令和2年8月25日
昭島市立富士見丘小学校
校長 稲垣 達也

幸いにも酷暑が和らいだ昨日、2学期を無事スタートすることができました。子供たちは学校が待ち遠しかったのか、笑顔いっぱい登校してきました。夏季休業中も感染症等に罹患することなく、保護者の皆様のご尽力の賜物と感謝申し上げます。始業式では、今年度初めて全校児童が校庭に集まることができました。すべての学年が大変立派な姿勢で、素晴らしい雰囲気を感じました。



始業式

新しい「当たり前」の創造 型破りな発想が突破口！！

この夏、イタリアの物理学者で作家のパオロ・ジョルダーノ氏の近著『コロナ時代の僕ら』（早川書房、令和2年4月24日）を読みました。コロナ禍の2月末から数日間で書かれたエッセイ集です。

私たちは今、地球規模の病気にかかっている最中であり、パンデミックが僕らの文明をレントゲンにかけているところだ。数々の真実が浮かび上がりつつあるが、そのいずれも流行の終焉とともに消えてなくなることだろう。もしも、僕らが今すぐそれを記憶に留めぬ限りは。

という一節に、大きく心を揺さぶられました。

コロナ禍は、偶発的な出来事ではなく、必然的な感染症の流行と捉えるべきです。このような感染症は、規模や形を変え、歴史上繰り返されてきました。当然、今後も、人知を超えた形で、再び起こり得ると考えられます。

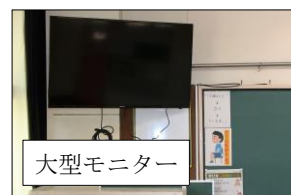
パオロ・ジョルダーノ氏が最も恐れていることは、「コロナが終息し、日常の生活が戻ってくることによって、歴史的感染症の流行を人々が少しずつ忘れていくこと」です。「コロナウイルスはどこから来て、人類に何を伝えようとしているのか」と、語っています。

日本では、ネットの話題のように、にわか仕立ての「知識」や「専門家」、拡散する不確かな「情報」、歪められたデータの中から「真理」を見出そうとする愚かさが目に余ります。まさに、想像力の欠如です。コロナ禍を、ワイドショーレベルで捉えている限り、人類に未来はありません。

今を生きる私たちは、コロナ以前とは異なる世界に向けての歩みを進めていかねばなりません。確固した正解のない問いに直面する日々、今までの当たり前や常識が通用しない時代を乗り越えるためには、これまでにない「型破りな発想」が解決の突破口になるのではないのでしょうか。

学校の使命 型を破るために必要な「基盤となる型」を学ぶ

「未来の守護者」である子供たちには、型を破るために必要な「基盤となる型」を身に付けることが大切です。そのために、確かな学力、生きる力を身に付ける教育を充実させることこそが、学校の使命です。私たち教職員がこれまでの発想や前例に囚われることなく、柔軟で豊かな考え方をもって、子供たちの教育に当たることが不可欠だと肝に銘じているところです。



大型モニター

富士見丘小学校は、このような考えに基づき、ICT等の活用や新しい指導方法を取り入れるなど、これからも「未来の守護者」を育てる教育に全力を尽くしてまいります。

保護者のみなさまにおかれましては、2学期も、今までと変わらず、子供たちを温かく見守り、慈しんでいただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。